

「利根川流域の古代地名現在地比定領域における近世河岸の位置付け」

2016.11.10 建築史研究室卒論発表会
中谷礼仁研究室〈千年村〉ゼミ
1X13A041-0 甲斐 貴彬

目次

序論

第一章 本研究について

- 1-1. 研究背景
- 1-2. 研究目的
- 1-3. 研究方法
- 1-4. 既往研究
- 1-5. 本研究の位置付け
- 1-6. 本研究についての前提

第二章 利根川流域における近世河岸のプロットと分析

- 2-1. はじめに
- 2-2. 近世河岸のプロット
 - 2-2-1. 文献から見る利根川流域の近世河岸立地
 - 2-2-2. プロットの定義
 - 2-2-3. 結果
- 2-3. 利根川流域における河岸の立地特性による分類
 - 2-3-1. 既往研究から見る河岸の性格
 - 2-3-2. 河岸分類における定義
 - 2-3-3. 結果
- 2-4. 小結

第三章 古代地名現在地比定領域と近世河岸プロットの関係性

- 3-1. はじめに
- 3-2. 本研究で扱う古代地名現在地比定領域について
- 3-3. 古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性
 - 3-3-1. 近世河岸と関連付けられる古代地名現在地比定領域
 - 3-3-2. 近世河岸と関連付けられる古代地名現在地比定領域が集中する領域
- 3-4. 各領域の分析
 - 3-4-1. 上流領域
 - 3-4-2. 中流領域
 - 3-4-3. 下流領域
- 3-5. 小結

第四章 利根川流域の古代地名現在地比定領域における近世河岸の位置付け

- 4-1. はじめに
- 4-2. 上領域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性
 - 4-2-1. 古代地名現在地比定領域の立地特性
 - 4-2-2. 河岸の機能
 - 4-2-3. 河岸の立地特長
 - 4-2-4. 上流域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性の考察
- 4-3. 中領域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性
 - 4-3-1. 古代地名現在地比定領域の立地特性
 - 4-3-2. 河岸の機能
 - 4-3-2-1. 足利市周辺
 - 4-3-2-2. 千代田町周辺
 - 4-3-2-3. 小山市周辺
 - 4-3-3. 河岸の立地特長
 - 4-3-3-1. 足利市周辺
 - 4-3-3-2. 千代田町周辺
 - 4-3-3-3. 小山市周辺
 - 4-3-4. 中流域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性の考察
- 4-4. 下領域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性
 - 4-4-1. 古代地名現在地比定領域の立地特性
 - 4-4-2. 河岸の機能
 - 4-4-3. 河岸の立地特長
 - 4-4-4. 下流域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性の考察
- 4-5. 利根川流域の古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係/パターンの類型化
- 4-6. 小結

第五章 結論

- 結論
- 謝辞
- 参考文献
- 図版出典

序論

研究背景

〈千年村〉研究では、『和名類聚抄』を元に古代地名の現在地比定を行い、さらに比定された集落を実見する取り組みを行ってきた。この一連の成果から、利根川水系と古代地名比定領域との関連性が指摘され、その立地特性や水害など主に集落構造、環境面について考察がなされてきた。特に、「古代地名領域における断絶と持続」では旧利根川流域について、1947年のカスリーン台風とその被害を元に行われた近代開発が古代地名領域の持続と断絶にどのような影響を与えたのかを明らかにした。

しかし、これはいずれも限られた地域に限定され、複数の県や関東全域に渡って考察されたものは少ない。また、水系を利用した交通である水運・舟運と古代地名比定領域との関係性について論じたものもない。

本論

第二章 利根川流域における近世河岸のプロットと分析

川名登『河岸』に記された河岸を Google Maps を用いてプロットしていきにあたり、プロット作業の定義を行った。

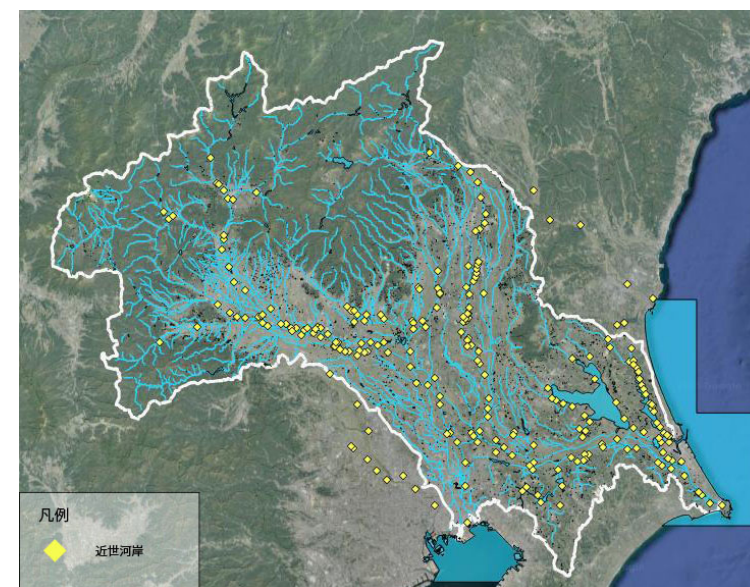


図2 利根川流域内の近世河岸プロット

研究目的

これまでの千年村研究では、山地・台地・低地などの地形に対する古代地名現在地比定領域の立地と古代地名現在地比定領域の生産性や防災性の高さとの関連性に着目して研究が行われてきた。本研究では、このような既往研究に対して、水運が集落の持続にどのような影響を与えたのか、また集落が水運の持続にどのような影響を与えたのかを明らかにすることを目的としたい。

この目的に対して、以下のような①水運網の立地特性を見ることと②集落の生業から河岸の機能を見ることの二つの視点を持って研究にのぞむ。

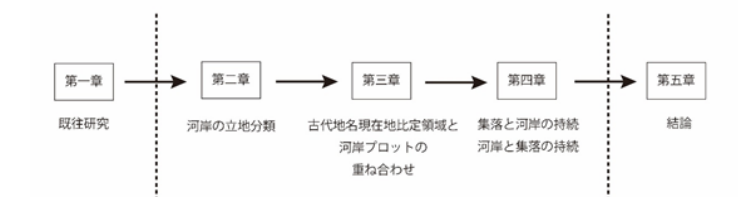


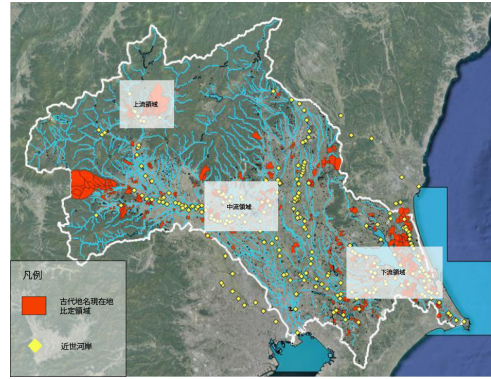
図1 目次構成

さらに、大井武「関東地方の河岸」(人文地理,1957)を元に、地図から見られる河岸の立地特長の分類について再定義を行い、6項目について以下のような結果を得られた。

- ①主要街道との交叉点…4
- ②河川の合流・分流点…64
- ③遡航終点…19
- ④神社の参拝口であったもの…5
- ⑤城下など都市近郊に位置するもの…12
- ⑥その他…121

第三章 古代地名現在地比定領域と近世河岸プロットの関係性

地図上の古代地名現在地比定領域に第二章で得た近世河岸プロットを重ね合わせると、以下の図のようになった。



この結果により、利根川流域の453の古代地名現在地比定領域の大字のうち、45の古代地名現在地比定領域の大字内に近世河岸が存在していたことが分かった。

また、左図に示す三地域において、近世河岸と関連付けられる古代地名現在地比定領域が集中していることが分かった。各地域を利根川上流から上流領域、中流領域、下流領域と名付ける。

図3 古代地名現在地比定領域と近世河岸プロット

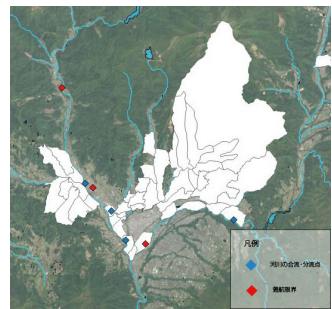


図4 上流領域

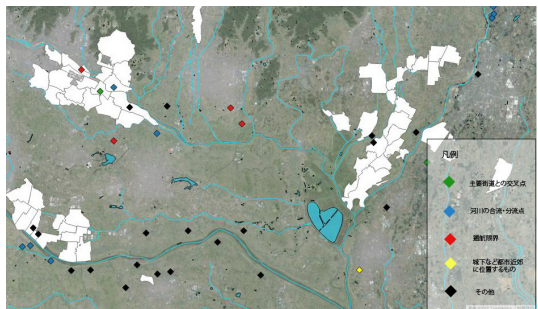


図5 中流領域

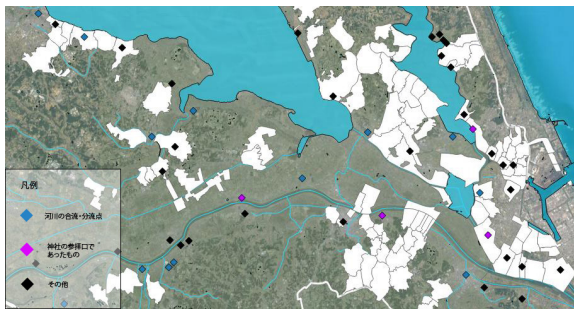


図6 下流領域

さらに、この3領域においてそれぞれ古代地名現在地比定領域内にある近世河岸の数とその立地特長を分析し、その立地傾向を見出した。

表1 3領域における近世河岸の立地特長

	上流領域	中流領域	下流領域
主要街道との交叉点			1
河川の合流・分流点	3	1	4
遡航終点	1	1	
神社の参拝口であったもの			3
その他		4	13
(合計)	4	7	20

第四章 利根川流域の古代地名現在地比定領域における近世河岸の位置付け

利根川流域の上流領域、中流領域、下流領域の3領域について、古代地名現在地比定領域の立地特性、領域内の河岸で流通した商品や流通先などから分かる河岸の性格、河岸の立地傾向についてまとめる。さらにこれらの要素を用いてそれぞれの領域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性について考察する。

①上流領域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性の考察

近世における古代地名現在地比定領域の集落は年貢を現金で納入しており、そのために林業をはじめとする農間余業が盛んであった。このような背景から、材木を効率よく江戸等の消費地へと輸送手段として筏河岸が開設されたと考えられる。つまり、上流領域の河岸は、貨幣経済の浸透という古代地名現在地比定領域を取り巻く社会の変化に対して、現金収入を得るため必要性が増したために、開設された河岸としてとらえることができる。この点において、古代地名現在地比定領域の持続性を近世河岸に見出すことが出来たとと言える。

②中流域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性の考察

中流領域の古代地名現在地比定領域は元々、河川の水深が変化する地点の近くに立地しており、近世に入って設置された河岸は必然的に遡航終点・積み替えのための中継地点という性格を獲得した。このような性格は、河岸が周辺地域に対して一定の影響を持ち続けるために必要であり、河岸が持続し続ける要因となったと考えられる。

また、中流領域の古代地名現在地比定領域は3街道に囲まれた地域に位置しており、その中心を利根川の水運が走っている。このような位置関係から、中流領域の近世河岸は街道の空気を水運で補いながら、街道同士を結び付けるという役割を持っていたと考えられる。

③下流域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性の考察

下流領域における近世河岸の成立以前の背景として、内海という水運に適した環境や中世から漁業・水運を生業としてきた人々と彼らの共同体があった。これらの背景を基盤として成立した近世河岸は、東北諸藩と江戸の中継点として、また東国三社のような観光地への窓口としての性格をもった。このように、近世河岸が商品や人の活発な行き来を支え、それが地域の生活や経済を安定につながったと考えられる。

○利根川流域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係パターンの類型化

利根川流域の3領域における、それぞれの古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性から、利根川流域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係パターンを見出し類型化する。

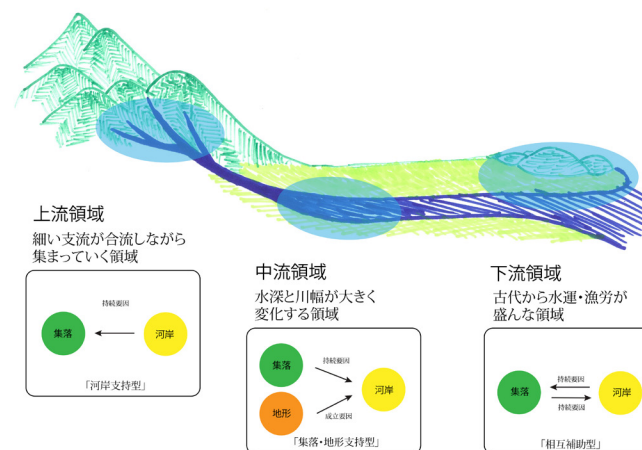
(1) 上流領域：上流領域の近世河岸は貨幣経済の浸透という社会の変化に対して、古代地名現在地比定領域が持続するために設置されたとの考察を行った。以上のことから、「河岸支持型」というーンを見出すことが出来る。

(2) 中流領域：中流領域の古代地名現在地比定領域は元々、河川の水深が変化する地点に立地しており、近世になって河岸が出来たときにこの立地特性が、河岸の遡航終点や中継地点という性格として反映された。このような性格を持った河岸は周辺地域の流通の重要な拠点となった。このことは河岸の持続につながる1つの要因として評価することが出来る。以上のことから、「集落・地形支持型」というパターンを見出すことが出来る。

(3) 下流領域：下流領域には香取海を起源とする水運に適した環境と中世からの水運・漁業の共同体という二つの基盤があった。また、近世において成立した河岸は商品や人の活発な行き来を支え、それが地域の生活や経済の安定につながったということが見いだせた。以上の事から、「相互補助型」というパターンを見出すことが出来る。

結論

利根川流域の上流領域、中流領域、下流領域の3領域について、古代地名現在地比定領域の立地特性、領域内の河岸で流通した商品や流通先などから分かる河岸の性格、河岸の立地傾向についてまとめた。さらにこれらの要素を用いてそれぞれの領域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係性について考察した。最後に、これらの考察から、利根川流域における古代地名現在地比定領域と近世河岸の関係パターンとして



上流領域：「河岸支持型」パターン
 中流領域：「集落・地形支持型」パターン
 下流領域：「相互補助型」パターン

を見出すことが出来た。